

景観とまちづくり 〜愛媛県内子町の取り組み〜

町並保存運動から発展した「美しい景観によるまちづくり」で数々の賞を受賞し、全国から注目を集めている愛媛県内子(うちこ)町。松山市の



南西約40キロに位置する内子町は、江戸時代末期から明治・大正時代にかけて和紙と木蝋(もくろう)の産地として栄えました。当時を偲ばせる木造白壁の商家が立ち並び650メートルほどの八日市護国(ようつかいちこく)町並保存地区をはじめ、大正時代の芝居小屋『内子座』など、伝統的な町並文化を見るために、国内のみならず海外からも多くの観光客が訪れています。現在、内子町を訪れる観光客の数は年間およそ百万人に達しています。しかし、美しい町並みを実現するまでには、数多くの課題を克服してきた住民と行政の努力がありました。

◎内子町の町並保存運動

内子町で町並保存運動が起るきっかけとなったのは、昭和50年に、雑誌『アサヒグラフ』で八日市護国地区の町並のすばらしさが紹介されたことです。しかし、当時の日本は、古いものはさっさと壊して新しく建て替えるのが当然の時代。八日市護国地区の木造家屋群は老朽化が進み、雨漏りがしたり、瓦が落ちかけていたりして、そのままでは取り壊される危機にあり

ました。『アサヒグラフ』

の記事でこの地区のすばらしさを再認識した地元住民の有志が町並保存会を発足し、「一度壊されてしまったら二度と造ることはできない」と、地域住民の皆さんを説得し、行政を動かしていきました。



八日市護国町並保存地区。電柱や電線が撤去されスッキリしている。

昭和53年には内子町の単独事業として伝統的建造物保存のための補助金交付制度が制定され少しずつ家屋の保存修理が進み始めました。そして昭和55年に内子町伝統的建造物群保存地区保存条例を制定、昭和57年には八日市護国地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、国庫補助による保存修理事業が始まりました。

発足当時わずか8名だった町並保存会は、現在では地区のほとんどの世帯が加入し、町並瓦版の発行、建造物等の修理の際の審議会等、自主的な保存会運営を実施しています。

◎引き算型のまちづくり

内子町の景観まちづくりは「除去・保護・転用・付加」という基本方針で進められています。

「除去」は、景観を損なうものを除去すること、例えば不法投棄のゴミや見苦しい看板などを取り除くことです。「保護」は、歴史的に重要なものや美しい景観を守ることです。「転用」は、使われな

くなった建物とか、要らなくなった施設などを安易に取り壊してしまつてはダメ、新しい使い方や活用すること、新しい時代に合った活用方法を見出していくことです。最後の「付加」は、どうしても必要な施設は新たに造るしかありませんが、従来の環境や景観をなるべく壊さないで、あくまで慎重に付加していくことです。

従来の「足し算型のまちづくり」では、新しい施設や建物(いわゆる箱モノ)を造ることが先行してきましたが、運営がうまくいかず、返って町の財政負担になってしまつたり、他の地域と似たり寄つたりの特徴のない町になってしまつという事例が多くみられます。これに対して、内子町のまちづくりは「引き算型のまちづくり」と言えるもので、「足し算型」に比べて財政的な負担が少ないうえに、地域の自然や歴史・伝統などの資産を活かし、美しい景観を作り出し、町の特徴を際立たせる効果があります。

たとえば、八日市護国町並保存地区において、雑然とした電柱と電線を、メイン道路沿いから家屋の背後に移して、道路から見えなくした結果、町並保存地区の景観が飛躍的に向上しま



内子ビジターセンターは、旧警察署の建物を利用している。



大正時代の芝居小屋『内子座』

した。

また、老朽化が進んでいた大正時代の木造瓦葺の芝居小屋『内子座』は、取り壊すのではなく、7千万円かけて修理・復元し、現在では年間7万人の入場者から300万円の入場料を徴収することで、年間2千万円の収入を得ています。

◎「景観まちづくり」の主役は住民

八日市護国地区で始まった町並保存運動は、内子町全体の農村の景観や文化を守り、山並みの自然を守るという「景観まちづくり」へと発展しています。



大正時代に造られた映画館『旭館』。懐かしい映画のポスターも飾られ、今も上映会等で使われている。

内子町が立案した「景観まちづくり計画」では、「景観保全は行政だけでは成果を上げることができない。なんといても住民がその気になって、自らの発想と創意工夫で景観づくりに取り組んでいかなくては全く進まない。」として、内子町内の各自治会が中心となり、それぞれの地区の「景観まちづくり」の計画を立て、行政と協力して計画を実行していくことを重視しています。

町が美しくなり、その美しい景観を求めて訪れる多くの観光客により経済効果も増加し、まちづくりに参加する住民にも活力がみなぎっている内子町の「景観まちづくり」の手法は、歴史と自然豊かな上関町でも大いに参考になると思います。

◎「わいわいタイムス」6月号は6月1日(日)発行予定です。